

<事例概要>

90歳女性、大腿骨頸部骨折

現病歴：骨粗鬆症と高血圧で内服治療中の90歳女性。

身の回りのことはほぼ自分で行えているが、年齢相応の認知機能の低下があり、同居している長男一家の嫁が鍵や財布の管理はおこなっている。数年前に夫が他界してからは家に閉じこもりがちとなった。最近のADLは、嫁がつき添って、杖をついてたまにゆっくりと近所を散歩する程度。「もうそろそろ、お迎えがくるわ。」と口癖のように言う。今回、自宅の縁側で転倒し、大腿骨頸部骨折の診断で整形外科病棟に入院となった。

主治医は手術が可能と判断し、患者本人と嫁に手術の説明もし、一応の同意を得た。しかし、患者は入院後明らかに精気がなく、食事量も普段の半分程度となってしまった。疼痛管理は行ったものの、体動時の痛みが残り身動きがとれないためか、夕方になるとたまに話のつじつまも合わず、他界した夫に話しかける素振りなど、せん妄と思われる症状もみとめるため、担当看護師間の申し送りでは、せん妄が悪化して安静が保てないかもしれないとの指摘がされた。

<本日の担当看護師と患者さんとの会話>

看護師（以下N）：「〇〇さん、あまり食欲無いですね。痛みはお薬を飲んでもつらいですか？」

患者（以下P）：「痛いすねえ。動けないんで、いっそのまま、お迎えがきてくれればどんなにいいか。」

N：「動けないのも、しんどいですかねえ。」

P：「そりゃあね。お手洗い一つ行けないんですよ。情けなくって。」

N：「先生から、手術のお話聞かれたんですよねえ。先生は、手術のこと、なんて言っていました？」

P：「先生は、手術したほうが早く良くなるって。でもね、けっこうな割合で死んでしまったり、手術したけど歩けないかもしれないってね、そんなこともおっしゃるんですよ。わたしはね、もうこの歳だし、できるなら無理なことはしないでね、これが若い人だったらいいけど。。。」

N：「〇〇さん、先生は、手術したらたぶん、動いたとき痛いのは楽になって、座ったり立ったりもできるようになるって。でも、歩くのはだいぶ歩く練習が必要なので、先生の言うとおりに、やってみなければわからないかな。もちろん手術なので危険は無いわけではないですけど、〇〇さんと同じくらいの年齢の人も、今まで何人か担当しましたが、手術のせいで死んでしまった人は、私は経験していません。」

P:「痛くなくなってくれば、それだけでも、どれだけ幸せか。」

N:「このまま手術しないでも、入院がひと月ふた月かかるかもしれないけど、痛みはだんだん減っていくとは思いますが。でもね、立ったりは難しいかもしれない。」

P:「わたしはねえ、痛いのが良くなっていくらかでも動けるようになるんだったら、手術はやりたいんです。」

N:「ご家族のご意見は、いかがですか？」

P:「△子さん（嫁）も、息子もねえ、お母さんがいいと思うほうに決めれば、どっちでも大丈夫だからとは言ってくれてるんで、わたしが決めなくちゃって思うんだけど、良くならないうえに、このまま死んでしまうんじゃないかと思ったら、不安でねえ。お話をうかがって本当によかったわ。ありがとう。」